

厚生仙台クリニック 新院長就任記念 特別対談

前院長 小田和 浩一 × 新院長 山口 龍生

2014年12月1日、厚生仙台クリニックは新たな体制での第一歩を踏み出しました。東北で初の民間PET検診施設として開業してから今日までの沿革を振り返りつつ、今後のPET検診やクリニックの展望について、前院長と新院長が語り合いました。

PETという縁で結ばれていた 二人の放射線科医の歩み

山 口 小田和先生は、2003年の開業以来11年にわたり、院長として厚生仙台クリニックを支えてこられました。後任として業務に携わってみて、小田和先生がいかにかんばってこられたかを改めて実感しています。本当にお疲れさまでした。

小田和 ありがとうございます。思い起こせば、山口先生には当クリニックの開業以前からお世話になっていましたね。山口先生が仙台星陵クリニックを開業された1991年当時、私は宮城県立成人病センター（現・宮城県立がんセンター）で放射線科の責任者を務めていました。その頃はまだMRIが普及し始めたばかりでしたから、センターの設備だけでは需要に応じきれず、仙台星陵クリニックにMRI検査をお願いしたことが多々ありました。画像診断センターとして先駆的な存在でしたからね。

山 口 今でこそ我々のような施設に独立画像診断センターという名称が与えられていますが、当時はまだそのような概念さえもない時代でした。一般的に、放射

線科医は病院内の一部門として役割を果たすのが主でしたから、その部門だけ独立して開業することはありませんでした。大学病院や基幹病院の放射線科では、MRI検査が混んでいてなかなか受けられないという状況の中、MRIやCTを備えた画像診断専門施設の需要が高まり、やがて放射線科医の独立開業が選択肢のひとつとなりました。厚生仙台クリニックもその延長線で開業された施設の一つと言えますが、PET検診を主軸とする画像診断センターであることが非常に先駆的でした。

小田和 民間の医療機関としては、東北地方で初めてPETを配備した施設ということになりますね。

山 口 PETについて、私は仙台星陵クリニック開業前の東北大学在籍中に研究をしていました。その当時はPETの黎明期でしたから、臨床での利用はまだ一般的でなく、将来的に臨床のPET検診施設ができれば携わりたいと考えていました。ですから、今回こちらのクリニックを継承してはどうかというお話をいただいた時に、これは非常にいいご縁ですし、ぜひとも引き継がせていただきたいと思いました。幸い小田和先生にも快くご了解いただき、感謝しております。



厚生仙台クリニック
前院長 小田和 浩一

1967年 東北大学医学部卒業。1968年 東北大学医学部助手。岩手県立中央病院放射線科、宮城県立成人病センター（現・宮城県立がんセンター）放射線科を経て、2003年 当クリニック院長就任。2014年 同院長退任。PET核医学認定医。



厚生仙台クリニック
院 長 山口 龍生

1980年 東北大学医学部卒業。1984年 東北大学大学院医学研究科修了。秋田県立脳血管研究センター放射線科、仙台厚生病院放射線科、東北大学抗酸菌病研究所放射線医学部門（現・加齢医学研究所機能画像医学分野）助手、仙台星陵クリニック院長を経て、2014年当クリニック院長就任。東北大学医学部臨床教授、東北大学加齢医学研究所非常勤講師、PET核医学認定医、放射線診断専門医、核医学専門医、老年病専門医。

小田和 このたびの院長引き継ぎに伴い、当クリニックの運営母体も山口先生が理事長を務める医療法人星陵会グループに移行します。画像診断のスペシャリストである放射線科医のグループが運営することにより、より信頼性の高いがん検診を目指して技術を向上させていけると考えています。検診を受けられる方々にとっても、これまで以上に安心していただけるでしょう。

ロコミで応援してくださった リピーターの皆さまに感謝

山 口 引き継ぎをして感じたのですが、当クリニックでPET検診を受けられる方々は、リピーターとして長年ご利用されているケースが多くみられますね。開業から現在までに、利用者の方々の動向に変化はありましたか？

小田和 当クリニックには保険診療と人間ドックという2本の柱があります。まず保険診療ですが、他の医療機関から患者さんをご紹介いただいて診療するというスタイル自体は開業当時から変わっていません。ただし、患者さんの人数は大きく変化しました。開業当時と違って、現在は全国にPET検診施設がたくさんありますから、患者さんは当然ながら最寄りの施設を利用されます。ですから、開業当時は他県からも大勢来ていただいていたのですが、現在はほとんど仙台市内や宮城県一円の医療機関からご紹介いただいた患者さんに限られています。

山 口 リピーターとなってくださるのは、もう1本の柱である人間ドックですね。こちらは東北地方の広範囲に利用者がいらっしゃいますが、どのようにして広がっていったのでしょうか？

小田和 当クリニックで人間ドックを継続的に受診さ

れている方々には、特徴的な傾向があります。60代から70代、さらにその上の年代になっても現役で活躍されている方が多く、具体的には中小企業の社長さんなど「私が倒れたら従業員が困るぞ」と強い責任感を持って健康に留意されている方ですね。病気がないというお墨付きをもらって「これでまた1年がんばれるぞ」と安心するために、年に1回PET検診を受けているとおっしゃる方が多い。そういう方々が、東北各県のいくつかの地域に集中しているのですよ。例えば、山形県なら米沢・長井・酒田・新庄といった具合で、特定の地域に。なぜかと言えば、それらの地域には高度な技術力で日本経済を支えている中小企業が集積しているからです。そうした地域から当クリニックにいられた方が、地域内の社長さん同士のネットワークで口コミによって紹介して下さるのです。

山口 なるほど。確かに、私が院長に就任してから対応した方からも「一度受けてみて良かったので、今回は知人も一緒に連れてきた」というお話を伺いました。

小田和 口コミによるネットワークは、非常に大切なも

のです。当クリニックの開業から3年ほどたったころ、大手新聞社が「PET検査は、他の検査方法に比べてがまんが見落とされやすい」と誤解させるような報道を行いました。これは、民間のPET施設で行われている総合的な画像診断の内容や意義をあえて無視したような、非常に不正確な記事だったのですが、その影響で一時期PET検診の受診者数が急減しました。しかし、実際にPET検診を受けたことでがんを早期発見でき、健康体を取り戻した方が口コミで広めてくださることで、ゆっくりとですが着実に受診者数は回復し、さらに増加を続けています。

山口 リピーターの方々が必要なリピーターづくりをして下さるといって、東北一円に広がっていったわけですね。私が受診者の方から伺ったお話では、PET検診の信頼性はもちろんのこと、当クリニックのスタッフ対応や施設の雰囲気にも好感を持たれていました。そういった面については、やはり小田和先生のお人柄が随所に反映されているのだと思います。

小田和 そんなことはありませんよ(笑)。ただ、PET検

診によって「苦痛を伴わない、短時間の検査で、ほぼ全身を総合的に診断する」というのが当クリニックの最大の特長ですから、安心してリラックスして検診を受けていただけるよう、スタッフ一同でホスピタリティー向上に努めてきました。ありがたいことに、受診された方の多くは継続的に再来されていますし、開業当時から10回以上続けてご利用くださる方も大勢いらっしゃいます。そういう方々に支えられて、当クリニックも私も今日まで役割を果たすことができました。心より感謝しております。また、長年にわたるお付き合いをいただくことで、温かいパーソナルコミュニケーションも培われました。山口先生には、そうしたかけがえのない絆も引き継いでいただけると信じています。

技術と信頼を継承しつつ、PETの新たな可能性を拓きたい

山口 もちろん、小田和先生が築いてこられた多くのことを、今後も大切に継承していきたいと考えています。人間ドックについては、仙台星陵クリニックでも「受診者の方々に安心を提供する」というテーマを第一に取り組んできましたから、受診者個人個人のニーズにしっかりと応えていけるでしょう。私たち放射線科医の特徴は「各科横断的」であることです。専門の枠に閉じこもることなく、各科の専門医と連携があり「どの先生はどのような分野が得意だ」ということをよく知っています。従って、検診で何らかの異常が見つかった場合「どの病院のどの先生に紹介するのが最適か」を判断するスキルに優れていると自負しています。そこを有効活用して、受診される方々へのコンサルトのクオリティーをさらに高めていきたいです。また、保険診療についても、近隣の病院のニーズを把握して的確に応えていきます。現在の保険診療において、PETはがん診断に



欠かせないツールになっていますので、今後も一定の需要は必ずあると考えています。

小田和 山口先生が院長となることで、仙台星陵クリニックとの連携も活性化しますね。双方の強みを活かした相乗効果が生まれるでしょう。特に脳ドックに関しては、従来のように腫瘍の検査だけでなく、予防医学分野での新たな展開も期待できます。

山口 私は東北大学在籍中から、画像診断を用いた脳の老化予防の研究に取り組んできました。仙台星陵クリニックは、脳ドックを主体として予防医学を推進したいという思いから立ち上げた施設ですので、そこで培ってきたことをPET検診と融合し、より発展させていきたいと願っています。PET検診は今、認知症の早期診断にかなり期待されている診断技術です。例えば「アミロイドPET」という画像診断法がありまして、これは将来認知症になる可能性が高い人をピックアップできるものです。技術そのものはある程度確立していて、それに用いる薬剤の合成装置もつい最近薬事承認されました。遠からずPET検診の診療科目として実用化されると見込んでおり、これを使えるようになれば従来のがん総合検診だけでなく、認知症にウエイトを置いた総合検診も可能になるでしょう。

小田和 それも中小企業の代表者の方々には重大な関心事ですね。ご自身が認知症になる可能性があ





れば、将来の事業計画にも関わってくるわけですから。実用化されれば確実に需要はあると思います。

山口 PETの診断技術とは、このようにさまざまな可能性を持ったものですから、ぜひ夢を持って取り組んでいきたいです。その点でも、小田和先生が築き上げてきた当クリニックを継承することには大きな意義を感じています。

小田和 山口先生ならきっとやり遂げてくださるでしょう。楽しみにして見守りたいと思います。最後に、開業から今日までご愛顧いただいた皆さまへ、重ねて御礼を申し上げます。皆さまのご健康のために、今後とも厚生仙台クリニックをお役立てくださいますよう、どうぞよろしくお願いたします。

※「PET検診」について

この対談の中で使用している「PET検診」とは、PET（陽電子断層撮影装置）を使った検査とMRI（磁気共鳴画像装置）、CT（X線断層撮影装置）、US（超音波検査装置）を組み合わせる検査を指しています。

仙台星陵クリニック

脳ドック・脳健診
X線CT・MRI画像診断センター

1991年の開業以来、予防医学・地域医療・画像診断センターの三つを業務の主体とする。脳ドックは全国でも早い時期の1992年3月より開始し、MRI検査を中心に脳卒中の予防医療を実践している。

〒980-0801
宮城県仙台市青葉区木町通2-4-45
TEL.022-273-3533(代表)
022-273-3460(ドック・健診)



脳のPET検査とは？～次世代脳のPET検査に向けて～

PETとは、Positron Emission Tomographyの略で、ポジトロン（陽電子）を放出するアイソトープで標識された“薬剤”を注射または吸入することで、その体内分布を特殊なカメラで映像化する画像診断法です。

脳の神経活動が高まるとその部位でブドウ糖代謝量、酸素消費量、血流量などが増大します。捉えたい指標に合わせて“薬剤”を選ぶことで、間接的に脳内の活動部位を画像化することができます。

ブドウ糖代謝を画像化したいときは、ブドウ糖と同じように細胞に取り込まれる¹⁸F-fluorodeoxy glucose（フルオロデオキシグルコース、FDG）を注射します。がんのPET画像診断でもFDGは広く用いられています。ブドウ糖と異なり、一旦細胞に取り込まれますが、その後腎臓を経て尿といっしょに体外に排泄されます。脳血流量や酸素代謝量を画像化したいときは、¹⁵O（酸素）で標識したH₂O（水）を注射したり、CO₂（二酸化炭素）、O₂（酸素）などのガスを吸入します。

図1はブドウ糖代謝の脳PET解析画像を示しています。認知症初期では、脳内の特定部位の活動が、MRIなどで確認される形態変化（萎縮）に先行して低

下することが知られています。当院では、FDG-PET画像を解析することにより、認知症の早期診断に役立っています。

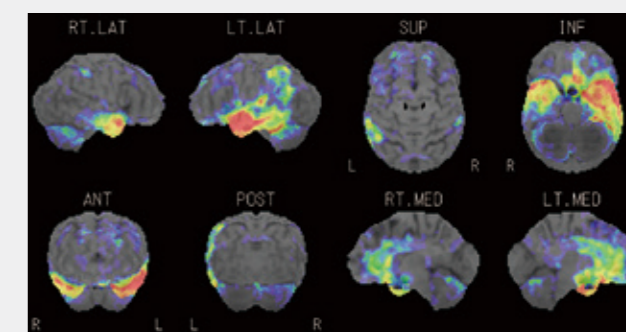


図1: FDG-PET画像当院施行例

脳のPETに関しては、上記の他にアミノ酸代謝（脳腫瘍の診断に有用）、神経伝達物質やその受容体（パーキンソン病などの変性疾患の診断に有用）、βアミロイドの脳内沈着（認知症の診断に有用）を、それぞれ画像化する“薬剤”もすでに開発されています。特にβアミロイドPET（図2～4）では、認知症を発症するかなり以前（10～20年前）から診断可能ともされ、今後の認知症診療の重要な画像診断法として期待されています。

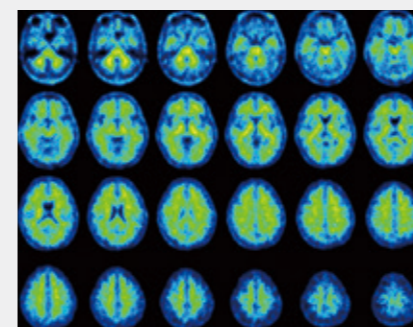


図2: 健常高齢者

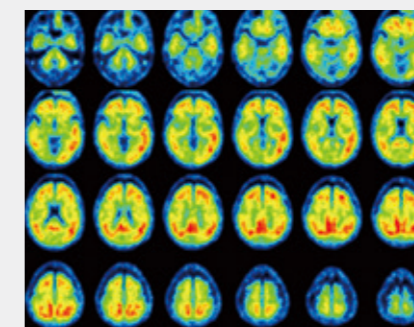


図3: MCI(軽度認知機能障害)

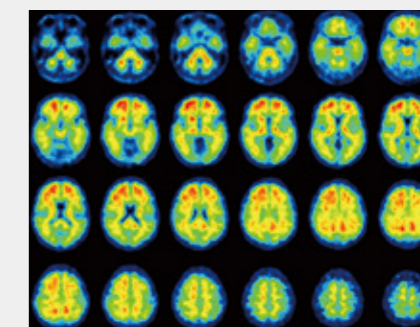


図4: AD(アルツハイマー型認知症)

※図2・図3・図4 (独)国立長寿医療センターより提供